

(第5号様式)

学位論文審査の結果の要旨

氏名	NGUYEN THI HUONG TRA
審査委員	主査 中道 仁美 副査 胡 柏 副査 市川 昌広 副査 亀山 宏 副査 池上 甲一

論文名

海外研修生派遣にみる政策と課題-ベトナム人農業技能研修・実習の現状と課題-
(Policy and Challenges on Dispatching Interns overseas -Current Situation and Challenges of Agricultural Programs for Vietnamese Trainees-)

審査結果の要旨

本論文は、日本の就業構造の変化とともに増加してきた、技能研修・実習制度について、ベトナムの政策視点から取り上げており、これまでの技能研修・実習制度研究とは異なる新しい研究視点を提示している。

本論文の課題は、ベトナム政府の政策課題を検証して、その課題解決方策の一つとして推進されてきた労働者の海外派遣（労働輸出）について、日本に派遣された労働者を事例に、その方策（活動）を検証し、課題を明らかにすることである。

ベトナム政府の政策課題については、雇用の確保、貧困解消、熟練労働者の確保に限定し、特に農村部の雇用の確保、貧困問題や熟練労働者の不足という課題に対し、農業の研修・技能実習生を事例に取り上げ、熟練技術習得の対象として、安全な野菜・果実生産の技術・技能・知識の習得に焦点を当てて考察している。

本論文の研究方法は、ベトナム・日本の資料・文献調査、及びベトナム・日本における事例調査である。

本論文の構成は、序章で課題の背景と方法について述べ、第1章でベトナム政府の政策の経緯について検証し、第2章で日本の外国人技能研修・実習制度の現状と経緯について検証し、第3章で日本の技能研修・実習制度、ベトナムの海外労働者派遣、ベトナムの果実・野菜中毒、ベトナムのNGOについて先行研究を考察し、第4章でベトナム、日本で行ったベトナム人有機農業研修生の調査事例について考察し、第5章でこれら検証・考察結果から、ベトナムの海外労働者派遣が政策課題解決に結びついていくのかを検証するものとなっている。

本論文では、まず、ベトナム政府の政策課題について、政府の長期計画に沿って、その目標を検証し、それが具体的な政策に至る経緯について資料や文献を丁寧に調べている。ベトナム政府が1986年にドイモイ政策以降、発展段階に応じた様々な政策を策定し、根底には常に貧困解消という大きな目的があったこと、経済発展により、増加する若年労働者の雇用の確保、熟練労働者の育成などが目標となり、貧困や失業、非熟練といった課題が農村部で顕著で、これらの課題を解決する手段の一つとして、海外への労働者派遣が重要な施策として打ち出され、法整備が行われ、近年は安全な野菜・果実生産が政策課題となり、法整備が行われたことなどが検証され、明らかになった。

日本の外国人技能研修・実習制度については、技能研修・実習生の増加傾向、ベトナム人が中国に次

いで多いこと、農業の業種は限定的で、農協が受け入れ機関であることが多いことなどが検証、明らかにされた。

先行研究では、日本の研究ではベトナム人対象のものはほとんどなく、制度に対する評価、受け入れ機関の問題、送り出し機関の問題などが大半であったが、農業面で研修・実習生の出身国との気候・風土の違いなどの農業の特殊性、帰国後の検証の欠如などが考察され、ベトナムの海外労働者派遣については、いかに多く派遣するかに研究が集中し、帰国後の労働者の活用方法に関する研究の欠如が考察され、ベトナムの安全野菜については、農家の技術知識の欠如の問題が考察され、ベトナム NGO については、政府との関係が深いことを考察により明らかにしていた。

事例研究では、貧困家庭が優先され、派遣の実目的は安全栽培技術、日本語研修で、帰国後も生かされていたこと、しかし、帰国後の技術者受け入れ機関は日本の組織だけであったこと、受け入れ農家からは日本語・日本文化研修の課題が示されていたことなどを考察し、明らかにしている。

これらの検証・考察結果から、貧困解消、若年労働者の雇用の確保、熟練労働者の育成、安全・安心野菜供給といった、ベトナム政府の政策課題は、日本への有機農業技術研修派遣事例にみる限り、十分な成果を上げていると言いき、弱小 NGO、ベトナムの NGO の資金問題、有機農家選定の問題、帰国後の受け入れ体制の問題、外国人研修生の競合の問題などが挙げられていた。

本論文は、以上のように、日本の技能研修・実習制度について、派遣側からの考察という新しい研究視点を与えている。また、ベトナム国の政策、日本の研修制度、先行研究など、資料・文献研究も丁寧に正確に行われており、標本数は少ないながらも事例調査も適正に行われ、分析的確であり、結果は十分に信頼足りうるものであり、博士論文として評価できる。

本論文の公開審査会は、2014 年 2 月 13 日に愛媛大学農学部で開催され、論文審査と質疑応答が行われた。それに引き続いて、学位論文審査委員会を開催して審査し、審査委員全員一致して本論文が博士（学術）の学位を授与するに値するものと判定した。